

戦国時代

本当の姿は？

最近の研究から

●上

戦闘嫌った武将

戦国時代は、多くの日本人にとって最も興味をそられる時代だろう。小説やテレビ、映画、ビジネス書などにひんぱんに取り上げられる。今年のNHK大河ドラマ「利家とまつ」の視聴率も好調だ。だが、いわば「常識」ともなっている戦国のありさまは、どうやら実際とはかなり違うことが明らかになってきた。最近の学説をもとに考

えら。 (宮代栄一)

論づけた。当時の戦闘は、弓などで離れた場所から攻撃するのが主で、斬り結ぶような「近接戦(白兵戦)」は、むしろ例外だった。

軍忠状とは、戦闘に参加した武者が自分の戦功を指揮官に申し立てた文書的一种だが、自身や部下の負傷した原因や場所を記したものが少なくない。

鈴木さんが応仁の乱(1467年)から島原の乱(1637、8年)までの文書を調べたところ、鉄砲の普及以前には、負傷の原因の60%以上が矢だった。投石を加えると全体の75%が「飛び道具」による負傷になる。

例外だった白兵戦

戦場での負傷、大半は飛び道具

戦闘時には馬を後方に下げることもしなかつた。戦場で馬が最も活躍するのは、敵を追い崩そうとするときか、敗走時だった。

「信長の戦国軍事学」などの著書がある歴史研究家の藤本正行さんによると、史料性が高いとされる「信長公記」には三段撃ちの記録がない。「現地の地形からみても、一斉に号令をかけての三段撃ちはまず不可能です。鉄砲の弾込めの速度には個人差がある。斉射しようとするれば、一番遅い者にそろえなければならず、現実的ではない」と話す。

一部の例外を除いて、戦国武将たちは好んで戦闘をしていた

なぜ、「正面攻撃」が「イチかバチかの迂回・奇襲攻撃」にされたしまったのだろうか。

藤本さんは、江戸初期に「信長公記」を改変した小瀬甫庵の「甫庵信長記」が刊行され、広く流布したことが大きい、という。「甫庵信長記は、結果を知っている後世の人が書いたため、戦闘は矛盾なく展開し、勝者は勝つべくして勝つ。大軍を迂回・奇襲作戦で破ったとした方がわかりやすいので、よく読まれ、常識化していったようです」

小説や講談本などと並んで、それに一役買ったのが、日本陸軍だ。陸軍参謀本部が編纂した『日本戦史』では、桶狭間の戦いが迂回・奇襲戦法の成功例として収録された。また白兵主義は、やはり陸軍によって、日露戦争(1904-05年)後、日本古来の戦法と喧伝された。これらは、いわば日本軍の精神的支柱となり、その後

の無理な作戦や無謀な白兵突撃につながっていった。

「長篠の戦いにしても、双方共に決戦を望んだわけではなく、互いに、相手が戦わないまま撤退するのではないかと考えていた節がある。戦国武将にとって兵士は財産。ただで補充が利くものではないし、損害には特に気を配る必要があった」と語る。

信長自身、圧力をかけ先方から開城させたり、敵方の属将を裏切らせたりといった「武力を背景とした外交戦」を得意としていた。

信長が今川義元を破った「桶狭間の戦い」(1560年)は、敵の油断について勝利を収めた迂回

など存在しなかつたんです」と鈴木さんは話す。白兵戦になるのは、予期せずに両軍が鉢合わせした場合や、恩賞目的で首を取ろうとした場合が多かつたようだ。

織田信長が、突撃してくる武田勝頼の騎馬隊を鉄砲の三段撃ちで破り、騎馬白兵時代に幕を下ろしたとされる「長篠の戦い」(1575年)も、実情は異なる。

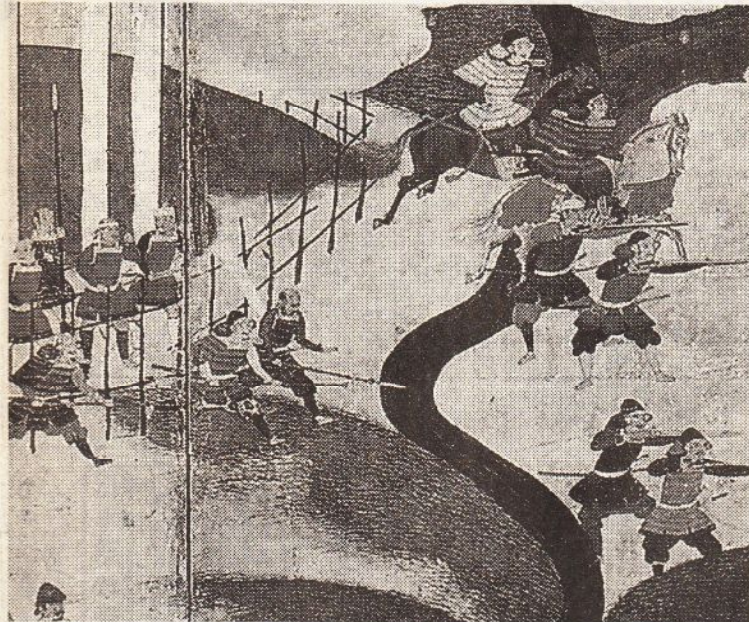
鈴木さんは「そもそも、騎馬隊の密集突撃などなかつたのでは」とみる。当時、日本を訪れた宣教師ルイス・フロイスは「彼らは戦いが始まる前に下馬してしまう」と記している。戦闘開始の際に、騎馬武者には、わざわざ馬から下りて戦うという傾向がみられたことがわかる。

「長篠の戦い」(1560年)は、敵の油断について勝利を収めた迂回

など存在しなかつたんです」と鈴木さんは話す。白兵戦になるのは、予期せずに両軍が鉢合わせした場合や、恩賞目的で首を取ろうとした場合が多かつたようだ。

織田信長が、突撃してくる武田勝頼の騎馬隊を鉄砲の三段撃ちで破り、騎馬白兵時代に幕を下ろしたとされる「長篠の戦い」(1575年)も、実情は異なる。

鈴木さんは「そもそも、騎馬隊の密集突撃などなかつたのでは」とみる。当時、日本を訪れた宣教師ルイス・フロイスは「彼らは戦いが始まる前に下馬してしまう」と記している。戦闘開始の際に、騎馬武者には、わざわざ馬から下りて戦うという傾向がみられたことがわかる。



長篠の戦いで布陣する織田・徳川連合軍。当時の記録の通り、鉄砲隊は馬防柵(さく)の外側で構えている = 「長篠合戦図屏風」部分(名古屋市博物館蔵)



「槍の又左」こと前田利家が、得意の槍を振り回しながら、敵陣に突入する――。

合戦シーンといえば、鎧武者が白刃をきらめかせて渡り合う。テレビでも小説でも、そんな描き方がごく普通になっている。しかし、『謎とき日本合戦史』

たことがわかる。